



読売新聞編集委員
丸山淳一

今につながる 日本史

完全版
2

— 賢者は歴史に学ぶ —

- ❖ スターリンの野望「北海道占領」を阻止した男
- ❖ 『アルキメデスの大戦』の史実が示す教訓とは
- ❖ 維新150年、西郷どんは「革命家」だったのか？
- ❖ あの会社の騒動も？ 義孝が謀反か、忠臣蔵の真実
- ❖ 「教養の達人」出口治明氏 ロングインタビュー ほか

— そんなことが昔もあった！ 面白すぎる20テーマを収録



読売新聞
アーカイブ選書

読売新聞アーカイブ選書

今につながる日本史 完全版 2

―賢者は歴史に学ぶ―

読売新聞社刊

〔第二十一話〕

政治

幕末・維新

維新百五十年 西郷どんは「革命家」だったのか

〔第二十二話〕

文化・芸術

通史

霸王信長も恐れた？ 「正倉院」千二百年の奇跡

——《余話》 正倉院は藤原仲麻呂のトランクルームだった？

〔第二十三話〕

政治

幕末・維新

実は兄以上の英傑？ 西郷どんイジメた上司の素顔

〔第二十四話〕

事件

江戸

あの会社の騒動も？ 義挙か謀反か、忠臣蔵の真実

〔第二十五話〕

スポーツ

明治以降

箱根駅伝をつくった「日本マラソンの父」

〔第二十六話〕

インタビュー

スポーツ

明治以降

箱根駅伝の人気を不動にした「いだてん」の千里眼
堂場瞬一さんの「駅伝囁」

〔第二十七話〕

災害

江戸

教訓は今も 「島原大変 肥後迷惑」での失敗とは

——《余話》 島原大変の前から災厄続きだった松平忠恕

〔第二十八話〕

経済

安土桃山

江戸

「裏切り者」を「人気者」にした明智光秀の大減税

〔第二十九話〕

外交・安保

太平洋戦争

「スターリンの野望」 北海道占領を阻止した男

〔第三十話〕

インタビュー

通史

「賢者は歴史に学ぶ」その理由

「教養の達人」 出口治明さんに聞く

〔第三十一話〕 **政治** **文化・芸術** **通史**

“考案者” が新元号に込めた平和主義

〔第三十二話〕 **経済** **通史**

巨大古墳と「黄金の日々」の裏で……自由都市・堺の苦難

——《余話》 足利義満に排除された大内義弘の疑心暗鬼

〔第三十三話〕 **政治** **太平洋戦争**

開戦直前にも「消された報告書」 秋丸機関とは

——《余話》 戦後復興に尽力した秋丸機関のメンバー

〔第三十四話〕 **外交・安保** **通史**

日韓対立を深刻にした三枚の旗

〔第三十五話〕 **暮らし** **通史**

ウナギ絶滅？ 万葉歌人と江戸の発明家が勧めたワケ

〔第三十六話〕 **外交・安保** **太平洋戦争**

戦死者一万人死闘を指揮した「南洋のサムライ」

——《余話》 生還三十四人最後の一人永井さん逝く

〔第三十七話〕 **外交・安保** **戦前**

『アルキメデスの大戦』の史実が示す教訓

——《余話》 艦艇計画に影響を与えた徳川家

〔第三十八話〕 **外交・安保** **戦後**

日韓対立の底流にある「もはや」の三文字

——《余話》 「積弊清算」で歴史を歪曲する韓国・文政権の罪

〔第三十九話〕 **政治** **通史**

焼失した首里城が琉球のシンボルとなった理由

——《余話》 正殿の大龍柱はどちらを向いていたのか

〔第四十話〕

政治

江戸

左遷や抗争巻き添え名門大名も味わった「転勤」の悲哀

天皇系図

第一話〜二十話は、『今につながる日本史 完全版1』に収録しています。

◎この電子書籍は、読売新聞オンラインの連載コラム「今につながる日本史」を、一部加筆のうえ再録したものです。文中の肩書、年齢、その他の情報は、掲載当時のものです。公開日はそれぞれのコラムの末尾に記しています。

【第二十一話】

維新百五十年

西郷どんは「革命家」だったのか

「動物好きのおじさん」から「ラストサムライ」まで、さまざまないメージで語り継がれる西郷隆盛（一八二八〜七七）。最近、新たに加わったのが「革命家」の顔だ。今年のNHK大河ドラマ「西郷どん」の演出が影響しているようだが、史実に照らすとどうなのか。西郷が活躍した明治維新は、日本の「革命」だったのか。

維新は「革命」か「革新」か

明治改元の詔から百五十年となる平成三十年（二〇一八年）十月二十三日、政府主催の記念式典が東京・永田町の憲政記念館で開かれた。かつての雄藩「薩長土肥」では「かごしま明治維新博」「やまぐち幕末ISHIN祭」「志国高知 幕末維新博」「肥前さが幕末維新博覧会」が開かれている。戊辰戦争で犠牲者を出した会津（福島県）などでは「維新」ではなく、会津でも「戊辰百五十年」の記念事業が目白押しだ。書店にも明治維新関連の書籍がたくさん並んでいる。

昭和三十七年（一九六二年）の創刊から五十六年で通巻二千五百点を迎えた中公新書は、記念作品として『日本史の論点』（中公新書編集部編）を出版した。気鋭の歴史学者五人が二十九の日本史の謎を解説する一冊なのだが、その中で慶応大教授の清水唯一朗さんが「明治維新は革命だったのか」を解き明かしている。

清水さんによると、「維新」という言葉は中国の古典『詩経』に由来し、「維新なり」、すなわち、すべてが改まり新しくなることを指す。英語では「復古（Restoration）」があてられている。最近では「革命（Revolution）」と規定すべきだ、という意見もあるが、Revolutionはフランス革命のような秩序の大変革を意味し、中国では「革命」は王朝（体制）の抜本的な入れ替えを意味する。

明治維新は、商人や農民が起こしたわけではない。政権は徳川から薩長土肥へと移ったが、清水さんは、江戸と明治に連続性があることを理由に、明治維新は極めて大規模な「革新（Innovation）」と見るべきだ、と主張している。

だが、維新百五十年にあわせて制作された『西郷どん』は、明らかに明治維新は革命で、西郷は革命家だったと位置づけている。それがわかるのが、流罪になっていた西郷隆盛が沖永良部島から薩摩（鹿児島県）に帰るシーンだ。



〈上〉政府主催の明治150年記念式典で式辞を述べる安倍首相（壇上）（二〇一八年十月二十三日）／〈下〉西郷隆盛と吉田松陰

憧れの人・ナポレオンの「正体」

ドラマでは、西郷と同じ流罪人だった川口雪篷（一八一九〜九〇）が、舟で島を出る西郷を、自ら書いた「革命」の旗を振って見送った。雪篷は、蘭学者の小関三英（一七八七〜一八三九）が翻訳したフランス皇帝ナポレオン（一七六九〜一八二一）の伝記『那波列翁（ナポレオン）伝初編』を島に持ち込み、西郷にナポレオンの業績を教えている。

雪篷がナポレオンを知っていた証拠はないが、書がうまく、流罪になる前は藩の書物の筆写が仕事だったというから、ナポレオンの伝記を読んでも、革命の旗を自作してもおかしくはない。ドラマの時代考証を担当した歴史学者の磯田道史さんは『素顔の西郷隆盛』の中で「西郷は島暮らして革命思想を育んだ」との見方を示している。このシーンには磯田さんの「革命家・西郷」を印象づける狙いがあったのだろう。

流罪中に読んでいたかどうかはともかく、西郷の自宅からは『那波列翁伝初編』が見つかったおり、西郷がナポレオン好きだったのは間違いない。吉田松陰（一八三〇〜五九）もこの伝記を獄中で読んで感動し、「草莽崛起」、すなわち「在野の人よ、立ち上がれ」と唱えている。

ナポレオンは自ら革命を起こしたわけではない。「抑圧された人々を自由にする」という大義を掲げる一方で、共和制を終わらせ、他国に次々と戦いを仕掛けて皇帝に就いている。彼が率いたフランス国民軍は徴兵制によって編成された「草莽」の集まりだったが、封建領主らの傭兵軍を次々に撃破している。

幕末の志士たちは革命の大義ではなく、下級士官に過ぎなかったナポレオンが草莽を近代的な軍にまとめあげ、封建勢力を打ち破ったことに感銘を受けたのではないか。

松陰の最後の弟子だった山田顕義（一八四四〜九二）は、戊辰戦争で討伐軍を指揮し、西郷から「あの小童、用兵の天才でござす」と絶賛されて「日本の小ナポレオン」と呼ばれた。山田はのちにナポレオン法典を学んで初代の司法大臣（今の法相）となる。

ちなみに山田が法学を普及させるため設立した日本法律学校が、今の日本大学だ。スポーツ関連の不祥事が続き、法令順守（コンプライアンス）が厳しく問われる今の姿を、「学祖」の山田はさぞ苦々しく見ているだろう。



〈上〉西郷も愛読した『南波列翁伝初編』（三巻、京都大学付属図書館所蔵）／〈下〉五十五歳の頃のハリィ・パー
クス（国際日本文化研究センター提供）

江戸総攻撃中止の真相

社会学者の大沢真幸さんも『日本史のなぞ』の中で、明治維新は革命ではなかったとみている。革命とは外部の力を借りず、意図的に起きる社会の変動であって、黒船来航という外圧をきっかけに起きた明治維新はこれに該当しないというわけだ。この考えに従えば、外圧を頼らず、自らの意思で前体制を破壊した人のみが革命家、ということになる。

『西郷どん』の中で西郷は、「日本のことは日本人で解決しなければならない」とイギリスの援助を拒否し、武力討幕に突き進む。武力を使わない大政奉還による政権交代を目指す坂本龍馬（一八三六〜六七）と対立し、「自分一人になっても慶喜の首を取る」と、執拗に徳川慶喜（一八三七〜一九一二）を追い詰める。SNS上には「西郷がダークサイドに墜ちた!」「戦いの鬼すぎて怖い」と、西郷の変わりぶりに戸惑う声が相次いだ。だが、「突然のキャラ変更」は西郷を革命家として描くには必要なことだったのだろう。

しかし、武力討幕のクライマックスでの実際の西郷の動きは、ドラマとはだいぶ異なる、との説もある。江戸総攻撃の直前、西郷は横浜にいたイギリス公使のハリー・パークス（一八二八〜八五）に使者を出し、総攻撃の了解を取ろうとした。ところがパークスは、新政府に恭順の意を示していた慶喜の討伐に強く反対し、慶喜の亡命をイギリスが受け入れる可能性にまで言及したという。返答を聞いた西郷はしばし愕然としたというが、勝海舟（一八二三〜九九）との会談ではそれまでの強硬姿勢をあっさり転換し、総攻撃の中止を承諾した。

西郷の方針転換は京都で開かれた三職会議で承認されたが、木戸孝允（一八三三〜七七）は西郷の豹変ぶりを「眼中には徳川しかないと言いつつ、実は欧州（イギリス）があるのみだ」と痛烈に皮肉っている（石井孝『明治維新の舞台裏』）。

西郷とともに慶喜抹殺を主張していた大久保利通（一八三〇〜七八）は、江戸総攻撃の一か月前には慶喜を助命し、備前藩（岡山県）お預けとする收拾案を示していた。百万の江戸市民の犠牲を避けるという西郷の決断がなければ無血開城は実現しなかったのは確かだが、そもそも江戸総攻撃の方針が慶喜に無条件降伏を迫る交渉戦術に過ぎず、パークスの意向に左右されていたとすれば、西郷や大久保は革命家というより、戦略家ではないか。

西郷らの方針転換を皮肉った木戸は、当初から慶喜の寛大な処置を主張していた。「維新の三傑」はいずれも、旧体制を完全に破壊し、江戸時代との完全な決別を追求したわけではなかったといえる。

西郷と勝が会談した薩摩藩邸跡（東京都港区三田）



明治維新と西郷をめぐるさまざまな評価

内村鑑三 (思想家、1861～1930)	西郷なくして革命が可能であったかとなると疑問。西郷に必要とされたのは、すべてを始動させる原動力であり、運動の方向を定める精神だった。（『代表的日本人』）
竹越与三郎 (歴史家、1865～1950)	イギリスのような「復古的革命」でも、フランスのような「理想的革命」でもない「乱世的革命」だ。（『新日本史』）
司馬遼太郎 (作家、1923～96)	幕藩体制の担い手だった武士階級が自らのハラキリによって廃藩置県を実現し、国民国家の土台を築いた世界でもまれな革命だ。（『明治』という国家）
渡部昇一 (評論家、1930～2017)	慶喜が隠退した時、田安家から養子に迎えた家達は、後に貴族院議長になった。明治維新が「革命」でなかったことは、この一例でもよくわかる。（『読む年表 日本の歴史』）
半藤一利 (作家、1930～2021)	明治維新はやっぱり暴力革命でしかない。その革命運動の名残が西南戦争まで続いた。西南戦争が終わるまでが幕末である。（『歴史に「何を」学ぶのか』）
井沢元彦 (歴史小説家)	革命とは前体制を破壊すること。やはり明治維新は偉大な革命だった。西郷は有能な破壊者だった。（『学校では教えてくれない日本史の授業 謎の真相』）
北岡伸一 (政治学者)	積極的に国を開き西欧諸国と対峙するために、国民すべてのエネルギーを動員すべく、特権層を打破した民主化革命で、人材登用革命だった。（『日本政治史』）
小林良彰 (慶応大学教授)	近代社会を作り出したという意味ではフランス革命と同じ。領主の権力が破壊され、商工業、金融業の上に立つ者が指導権を握った。（『明治維新とフランス革命』）

敬称略、見解は要約

維新の意義から日本史を考える

にもかかわらず、明治維新は日本を大きく変えた。勝者となった薩長土肥の士族が、版籍奉還や廃藩置県を通じて禄と領土という自らの特権を手放し、「王政復古」の一方で「文明開化」という一見矛盾する改革を平和裏に進めたことが大きい。

フランス革命では二百万人の血が流れたが、戊辰戦争は三万人といわれる。それに続く改革はほとんど抵抗なく行われ、司馬遼太郎（一九二三〜九六）は「明治維新は世界でもまれな革命だった」（『明治』という国家）と書いている。

これまでも歴史学者はもちろん、多くの文化人が明治維新の意義を考察し、数え切れないほどの著作や論文を残している。戦前の「日本資本主義論争」でも維新の意義や、やり残した革命について大きな論争になり、この論争が戦後に共産党系と社会党左派などの非共産党系が分かれる一因となった。

新政府は旧幕臣も積極的に登用し、「万機公論で決する」仕組みは近代憲法、議会制導入へとつながった。一方、中央集権、官僚国家を土台とする政治体制は、制度疲労を起こしているようにもみえる。

革命かどうかなどどうでもいいではないか、と思う人もいるだろうが、平成の終わりの年に維新百五十年を迎えた秋の夜長に、日本の歩みを振り返るのも悪くない。『日本史の論点』は巻末に、執筆陣が選ぶ各時代の必読書「日本史をつかむ百冊」もついている。中公新書が創刊された年に生まれた筆者の書棚にある中公新書は三十点に満たないが、好きな歴史物を読み直し、知的な鉱脈を探したい。



明治改元百五十年の日の「深層NEWS」では、尚美学園大講師で『明治維新と幕臣』の著書がある門松秀樹さんと、近現代史研究者の辻田真佐憲さんに、明治維新の意義について語ってもらった。

門松さんは、江戸と明治には連続性があるとしたうえで、「明治国家の建設にあたっては、大久保（利通）の下で行政実務にあたった旧幕臣の官僚集団の役割が大きかった」と指摘した。王政「復古」を号令しながら文明「開化」を進めることができた理由については、王政復古の大号令の中にある「諸事神武創業ノ始ニ原づキ」という言葉にカギがあると解説した。朝廷はどの時代まで「復古」するか議論し、結局は史実の記録がない「神武の昔」に戻ること、前例に縛られない政策を進めることができた、というわけだ。

辻田さんは、維新の立役者として明治天皇（一八五二〜一九一二）に注目し、「政治的動きをしたわけではないが、長い間シンボルとして、時代に安定感を与えた」と評価した。また、「明治維新が

作った官僚制度は、維新の元勳たちが去った後、誰がどのようにコントロールするかという命題を抱え続けている」と指摘した。

歴史に興味を持つ人が増え、歴史の実証研究も進んでいるが、維新が目指した「万機公論」を進めるには、「『物語』と『研究』のギャップを埋める議論の土台をつくる必要」（辻田さん）があるのかも知れない。

主要参考文献

- 中公新書編集部編『日本史の論点 邪馬台国から象徴天皇制まで』（二〇一八、中公新書）
磯田道史『素顔の西郷隆盛』（二〇一八、新潮新書）
石井孝『明治維新の舞台裏』（一九七五、岩波新書）
司馬遼太郎『明治』という国家』（一九八九、NHKブックス）
門松秀樹『明治維新と幕臣 「ノンキャリア」の底力』（二〇一四、中公新書）
竹越与三郎『新日本史（上、下）』（二〇〇五、岩波文庫）
山本七平『日本人を動かす原理 日本の革命の哲学』（一九九二、PHP文庫）
大澤真幸『日本史のなぜ なぜこの国で一度だけ革命が成功したのか』（二〇一六、朝日新書）

（二〇一八年十月二十三日）

「第二十二話」

霸王信長も恐れた？

「正倉院」千二百年の奇跡

小学校の卒業時などに「タイムカプセル」を埋めるのは、地中が長期保存に最も適しているからだ。倉庫などでは、紛れたり、盗まれたり、火事に遭ったりするリスクがつきまとう。にもかかわらず、千二百年を超えて世界レベルの至宝を守ってきた奈良の正倉院は、「奇跡の保管庫」と言える。その威厳は、傍若無人で聞こえた戦国の覇者をも畏かしこまらせたという。

官爵ない人にも至宝を……門戸開いた文豪

今年も正倉院展（主催・奈良国立博物館、特別協力・読売新聞社）が始まった。七十回目の節目で平成最後の開催となる。メモリアルイヤーにふさわしい五十六件（うち初出展十件）の宝物が公開されている。

開会式のあいさつで宮内庁正倉院事務所の西川明彦所長は「宝物を官位や爵位がなくても見られるようにしたのは、実は森鷗外（一八六二～一九二二）なのです」と紹介した。晩年に帝室博物館総長兼ずしよのかみ書頭に就任した鷗外は、年に一度の宝物の虫干しにあわせて研究者にも公開するよう働きかけ、大正九年（一九二〇年）度から研究者が宝物を調査できるようにしている。

*この続きは製品版でお楽しみください。

読売新聞アーカイブ選書

今につながる日本史 完全版 2

―賢者は歴史に学ぶ―

発行日 2024年6月25日

著者 読売新聞東京本社編集委員 丸山淳一

発行者 村岡彰敏

発行所 読売新聞東京本社

〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

URL: <https://www.yomiuri.co.jp/>

©2024 The Yomiuri Shimbun

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償、無償にかかわらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。